

## 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連

清水 健 司<sup>1</sup> 海 塚 敏 郎<sup>2</sup>

本研究は、青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向との関連について検討することを目的とした。大学生336名を対象として対人恐怖心性尺度と自己愛人格目録の質問紙を施行した。分析の結果、対人恐怖心性と自己愛傾向には有意な負の相関が見られた。これは、いくつかの対人恐怖心性と自己愛傾向の関連のパターンが混在している状態であるという解釈可能性を示していた。また、クラスター分析を行った結果、対人恐怖心性と自己愛傾向のパターンには4つサブタイプがあることが示された。これらは、臨床的な知見を参考にすると第1クラスターは、「純粋な」対人恐怖であり、第2クラスターは、「過敏型」自己愛人格であり、第3クラスターは、「ふれ合い恐怖的心性」に類似したものと推測され、第4クラスターは、「無関心型」自己愛人格であるとそれぞれ解釈された。このなかで第2クラスターと第4クラスターは、対人恐怖心性が自己愛の影響を大きく受けていることが分かり、自己愛の高まりが対人恐怖心性を増大させていることを示した。

キーワード：対人恐怖心性，自己愛傾向，青年期

### 序 論

対人恐怖症は、日本人に非常に多く見られ思春期・青年期に特徴的に見られる神経症の一種である(永井, 1994)が、そのなかで一般学生を対象にした稲浪・笠原(1968)や木村(1982)の調査においても、多くの学生が対人恐怖的な体験を自覚しているという報告が見られている。このことから今日では、神経症などの病態として直接に発症として結びつかないまでも、健全な一般青年においても対人恐怖の傾向である人見知りや過度の気遣い、対人緊張などの対人恐怖心性(心理的な傾向)が認められるものは非常に多く存在しており、また、青年期の正常な発達過程においてもよく経験されるものと言われている。

この対人恐怖心性については青年一般の問題としての視点から青年期心性として数多くの研究がなされてきている(永井, 1994)。

ところで最近、臨床的な体験からの知見において対人恐怖が自己愛との関連について述べられている文献が見られるようになってきている。自己愛はDSM-IV(APA, 1994)のなかで診断基準として記述されているように、誇大性、賞賛されたいという欲求、共感性の欠如の広範な様式であり成人期早期までに始まり、種々の状況で示されるという自己愛人格障害としてあげら

れている。しかし、この自己愛は必ずしもこのような臨床症状として扱われるだけではなく、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求によって説明される自己愛傾向(小塩, 1998b)として青年期特有の人格の特徴でもあるとされている。

この最近、数を増やしつつある臨床的な体験からの知見における対人恐怖と自己愛のかかわりに関して北西(1998)は、臨床精神病理学的立場から自己のあり方を論じており、対人恐怖で苦しむ人たちは行き過ぎた自己意識ゆえに鋭く悩み、それは自己に執着している姿であるとしている。

つまり、それは昨今の自己心理学の説く自己愛の病理とも言い換えることができると述べている。また、岡野(1998)は、この10年ほどのあいだに恥の病理が自己愛人格障害との関連で広く論じられるようになったことに呼応して現代的な精神分析の視点からは、対人恐怖者のもつ性格構造は自己愛の病理として捉えられるとしている。これは、恥の感覚にとらわれやすく対人恐怖を経験しやすい人には、他人に認められたい、評価されたいという人一倍の欲求があり、それに圧倒される形で対人場面での恐怖感が生まれるという捉え方である。

しかし、それと同時に岡野は、すべての対人恐怖の人が自己愛的であるとは限らないとも述べている。例えば、同じ対人恐怖傾向をもちながら誇大的かつ自信過剰で傍若無人な自己愛的性格者と対人恐怖的で他人

<sup>1</sup> 広島修道大学大学院人文科学研究科  
(現所属：白寿会 特別養護老人ホーム コスモス園)

<sup>2</sup> 広島修道大学(現所属：広島国際大学)

の視線に敏感な自己愛的性格者が存在する中で、この両者の間には大きな隔たりがあるとしている。つまり、対人恐怖傾向と自己愛傾向の関わり合いには様々な程度があることが考えられ、その臨床像にも様々な種類があることが考えられるとしている。これは、対人恐怖と自己愛の関係が一口に“対人恐怖は自己愛の病理である”と言い切れるものではなく、対人恐怖と自己愛が複雑に関係していることを示唆している。

この対人恐怖と自己愛の関係の整理方法には、まず自己愛の病理から出発して対人恐怖的なものを含むものと含まないものの2つに分けられるとしているものが見られている。Broucek (1991) は、自己愛人格障害をこの分類にしたがって対人恐怖的な傾向を含む自己愛人格を「解離型」として引きこもりがちで恥の感覚が強い性格であるとし、対人恐怖的な傾向を含まない自己愛人格を「自己中心型」として誇大的で傍若無人な性格であると分類している。また、Gabbard (1989) も同様に自己愛人格障害を分類する中で、周囲に対して過剰に気にかける (hypervigilant type) 自己愛者であり他者の評価に過敏で対人恐怖的な性格であるものを「過敏型」とし、周囲を気にかけない (oblivious type) 自己愛者であり傍若無人で自己顕示欲が強いものを「無関心型」としてサブタイプに分類している。

さらに、北西 (1995) も自己愛人格障害には2つのタイプがあり、周囲を気にかけないような自己愛的な人と周囲を過剰に気にする自己愛的な人が存在すると述べている。これらの先行研究が示すように、最近では対人恐怖は自己愛の病理であるとの報告が臨床的な方面から出されており、自己愛からの視点を出発点とした対人恐怖と自己愛とのサブタイプの分け方には、いくつかのものがあることがすでに報告されている。

しかし、これらの検討は病理としての“対人恐怖症”や“自己愛人格障害”として精神医学的な臨床的視点で論じられる機会は多くなってきてはいるが、健全な青年期心性としての視点での論議はまだそれほど厳密にされてきたわけではない。

もちろん、対人恐怖と自己愛の関連において「対人恐怖は自己愛の病理である」との臨床的な知見と健全な青年において誰にでも見られるような対人恐怖心性と自己愛傾向の関連においての一般的な青年期心性の知見は、いわゆる“臨床群”と“正常群”の違いとして大きく意味を異にすることも当然考えられる。

しかし、自己の肯定的感覚が強く、対人恐怖心性が高い Gabbard のいうところの「過敏型」の様相を示す青年の存在と、同様に自己の肯定的感覚が強く、対人

恐怖心性が低い「無関心型」の様相を示す青年の存在はそれほど我々にとっては想像に難くないところではある。従来の“正常群”においての知見では対人恐怖心性は自らの低い自己評価の下で生じやすい (岡田・永井, 1990) と記述されるにとどまっている現状がある。しかし、それだけでは上記のような青年の存在は説明がつかないことになる。このような問題は着々と積み上げられてきた“臨床群”の知見を参考にして説明できる可能性はないだろうか。

これらのことから勘案すると正常な青年期の特徴として扱われる対人恐怖心性と青年期と密接にかかわりをもち、自分自身に対する肯定的感覚によって説明される自己愛傾向との関連において、これらがいくつかのサブタイプに分けられる可能性があることが考えられる。これを念頭に置いて、対人恐怖心性と自己愛傾向はどのようなサブタイプに分類されるのであろうか、また、それぞれのサブタイプがどのような様相を呈するのかを実証的に検討してゆくことは、青年期の心性を理解する上で大変重要であると思われる。

ところで健全な青年の対人恐怖心性を測定する尺度として、堀井・小川 (1996) が、30項目からなる簡便な「対人恐怖心性尺度」を作成している。また、この「対人恐怖心性尺度」は作成者である堀井・小川 (1997a) が自らの手によって信頼性と妥当性についての問題に対して、すでに標準化されている Y-G 性格検査との関連性を検討するなどしてこの心理測定尺度が一定水準以上の信頼性と妥当性を持つことを確認している。

また、自己愛傾向の先行研究については、ここ数十年で様々なものが見られるようになってきている。その中で Raskin & Hall (1979) の作成した自己愛傾向を測定する尺度である NPI の存在は大きなところである。彼らは、健全な人格特性としての自己愛傾向を測定することを目的として自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory) を開発した。この NPI の原版は、Raskin & Hall (1981) の自らの手によって、また、Emmons (1981) などによって信頼性と妥当性についての詳細な検討がなされてきた。

日本でもこの NPI を日本語版に作成したものが多く見られる。宮下・上地 (1985) は、全35項目からなる NPI 項目 (7件法) を作成し、佐方 (1986) は、全42項目からなる NPI 項目 (5件法) を作成し、山本 (1993) は、全27項目からなる NPI 項目 (4件法) を作成している。さらに、小塩 (1998c) は、全30項目からなる自己愛人格目録の短縮版である NPI-S (5件法) を作成している。これらの先行研究の存在が示す通り NPI の日本語版

の作成についての研究だけでも数多くのものがあり、抽出される因子名がそれぞれの作成者によって多少異なることが見られるものの健全な人格特性を測定する尺度としては信頼性及び妥当性の検討などを通し、質問項目の精選によって非常に有用な心理測定尺度として扱われてきている。

健全青年を対象とした対人恐怖と自己愛の関連についての実証的研究は筆者の知る限りではまだ見られていないが、大平(1989)は内在的な不安と自己愛との関連を検討している。その結果、内在的な不安に対して自己愛の各因子がそれぞれ異なった方向で影響を与えていることを示してはいるが、これは不安と自己愛を単一次元でしか捉えておらず、これではまだ不十分であり、対人恐怖を自己愛との関連において捉えられるとした研究はまだ見られていない。

このような問題意識に基づいて本研究では、対人恐怖心性尺度とNPI-S(自己愛人格目録短縮版)を使用し、ともに青年期の特徴として扱われる対人恐怖心性と自己愛傾向との関連を実証的に分析し、“臨床群”からの知見を参考にして“正常群”においては、どのような対人恐怖心性と自己愛傾向のサブタイプが見られるのか、また、どのように自己愛傾向が対人恐怖心性に影響を与えているのかを見てゆくことを目的としている。

## 方 法

### 質問紙の構成

1. 回答者の基本的属性要因：学年・年齢・性別について記入してもらった。
2. 対人恐怖心性尺度：堀井・小川(1997a)によるものを使用した。30項目のそれぞれについて“全然当てはまらない”から“非常に当てはまる”の7段階で評定してもらった。
3. 自己愛人格目録短縮版(NPI-S)：自己愛の程度を測定するために小塩(1998c)が作成した自己愛人格目録を使用した。30項目のそれぞれについて“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”の5段階で評定してもらった。

### 調査対象

H県内の大学に通う大学生及び大学院生(合計336名)を対象とした。回答者の内訳をTABLE 1に示した。また、回答者全体の平均年齢は19.7歳(SD=1.49)であった。

### 調査時期・形式

2000年5月から6月にかけて集団で一斉に実施した。回答所要時間は15分から20分であった。また、質問紙

TABLE 1 被験者の内訳

性別	学年					総計
	1年生	2年生	3年生	4年生	大学院生	
女	54	92	29	15	9	199
男	40	52	25	9	11	137
総計	94	144	54	24	20	336

については無記名で記入してもらった。

## 結 果

### 対人恐怖心性尺度の検討

各項目の得点(1~7点)は、得点が高いほど対人恐怖心性が高くなるように採点した。また、因子分析(主成分分解-Varimax回転)を行い、固有値1.0以上を因子数の抽出基準とし、6因子を抽出した。この6因子の累積説明率は67.9%であった。質問項目番号2.8.14.20.26.は第1因子に強い負荷量を示しており<集団に溶け込めない>ような悩みを表している。4.10.16.22.28.は第2因子に強い負荷量を示しており<目が気になる>ような悩みを表している。3.9.15.21.27.は第3因子に強い負荷量を示しており<社会的場面で当惑する>ような悩みを表している。5.11.17.23.29.は第4因子に強い負荷量を示しており<自分を統制できない>ような悩みを表している。6.12.18.24.30.は第5因子に強い負荷量を示しており<生きることに疲れている>ような悩みを表している。1.7.13.19.25.は第6因子に強い負荷量を示しており<自分や他人が気になる>ような悩みを表している。また、因子分析結果をTABLE 2に示した。

### 対人恐怖心性尺度の信頼性

項目-全体得点相関及びG-P分析によって項目分析をした結果、全30項目が0.1%水準で有意であり、 $\alpha$ 係数は.936であった。従って本研究では全30項目を分析に用いた。

### 対人恐怖心性下位尺度得点の基本的属性による差異

学年・年齢・性別による得点の比較をしたところ各因子ごとの下位尺度得点にも下位尺度合計得点にも明確な差は見られなかった。

### NPI-Sの検討

各項目の得点(1~5点)は、得点が高いほど自己愛傾向が高くなるように採点した。また、因子分析(主成分分解-Varimax回転)を行った結果、固有値1.0以上を因子数の抽出基準とし、4因子を抽出した。この4因子の累積説明率は51.7%であった。

質問項目番号2.5.8.11.14.17.20.23.26.29.は、第1因子に強い因子負荷量を示していることから<注目・

TABLE 2 対人恐怖心性尺度の因子分析結果 (Varimax 回転)

質問項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	Factor6	共通性
8 グループでの付き合いが苦手である。	.824	.177	.171	.104	.128	.060	.770
14 仲間の中に溶け込めない。	.818	.237	.115	.117	.187	.121	.802
2 集団の中に溶け込めない。	.766	.158	.316	.092	.097	.114	.743
20 人との交際が苦手である。	.729	.298	.287	.138	.188	.118	.772
26 人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない。	.653	.189	.463	.102	.054	.214	.736
4 人と目を合わせてもらえない。	.155	.806	.299	.062	.092	.087	.784
16 人と話をするとき、目をどこに持っていったらいいのかわからない。	.195	.798	.181	.048	.162	.171	.766
22 顔をジーンとみられるのがつらい。	.121	.784	.196	.115	.043	.133	.701
10 人の目を見るのがとてもつらい。	.232	.760	.253	.112	.170	.063	.741
28 向かい合って仕事をしているとき、相手に顔を見られるのがつらい。	.259	.717	.110	.108	.128	.211	.665
9 会議などの発言が困難である。	.079	.118	.801	.113	.072	.034	.681
15 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない。	.304	.236	.761	.059	.112	.073	.748
3 人前に出るとオドオドしてしまう。	.121	.321	.722	.099	.072	.181	.687
21 大勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である。	.343	.307	.674	.143	.002	.090	.695
27 引っ込み思案である。	.432	.138	.640	.115	.109	.128	.657
23 意志が弱い。	.006	.057	.124	.824	.089	.046	.708
11 根気がなく、何事も長続きしない。	.100	.065	.073	.809	.077	.048	.683
5 ひとつのことに集中できない。	.045	.104	.029	.722	.122	.064	.554
29 すぐに気持ちがくじける。	.181	.198	.057	.705	.201	.200	.653
17 計画を立てても実行がとまなわない。	.120	-.015	.130	.685	.094	.105	.521
18 いつも疲れているような感じがする。	-.044	.025	.119	.017	.787	.209	.681
24 いつも頭が重い。	.088	.138	-.072	.130	.753	.199	.655
6 生きていることに価値を見出せない。	.290	.185	.182	.232	.584	.003	.546
30 何をやってもうまく行かない。	.275	.170	.024	.339	.572	.195	.585
12 充実して生きている感じがしない。	.340	.129	.244	.240	.567	.008	.571
1 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる。	-.046	.082	.231	.096	.007	.849	.792
7 自分が人にどう見られているのかよく考えてしまう。	.123	.160	.200	.152	.178	.787	.755
19 自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする。	.321	.170	.043	.092	.362	.589	.621
13 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう。	.445	.215	.012	.118	.277	.558	.646
25 人と会うとき、自分の顔つきが気になる。	.187	.303	-.094	.183	.251	.476	.459
説明分散	4.205	3.874	3.539	3.318	2.773	2.665	
累積寄与率	36.36	45.89	52.79	58.82	63.82	67.92	

賞賛欲求> 因子と命名し、3.6.9.12.15.21.24.27.30. は、第2因子に強い負荷量を示していることから<自己主張性> 因子と命名した。また、1.4.7.10.16.25. は、第3因子に強い負荷量を示していることから<有能感> 因子と命名し、13.18.19.22.28. は、第4因子に強い負荷量を示していることから<優越感> 因子と命名した。また、因子分析結果を TABLE 3 に示した。

#### NPI-S の信頼性

項目-全体得点相関及び G-P 分析によって項目分析した結果、全30項目が0.1%水準で有意であり、 $\alpha$  係数は.910であった。従って本研究では全30項目を分析に使用した。

#### NPI-S 得点の基本的属性による差異

学年・年齢・性別による得点の比較をしたところ第3因子である<有能感> 因子の下位尺度得点において(男子: 16.72, SD=5.58 女子: 14.52, SD=4.31) 男子の方が女子より有意に高い得点を示した ( $t[334]=4.059$   $p<.05$ )。また、NPI 下位尺度合計得点において(男子: 92.88, SD=18.56 女子: 88.9, SD=14.88) 男子の方が女子よりも有意に高い得点を示した ( $t[334]=2.175$   $p<.05$ )。また、その他の因子には明確な差は見られなかった。

#### 対人恐怖心性尺度と NPI-S の相関分析

NPI-S において性差が見られたことで対人恐怖心性と自己愛傾向の関連について男女ごとでの構造的な差異が存在する可能性があったため、男女別での相関分析を行ったが、結果には大きな差異がほとんど見られなかったために以下の分析では学年・年齢・性別の基本的属性要因を全て込みにして分析することとした。対人恐怖心性尺度と NPI-S の相関表を TABLE 4 に示した。TABLE 4 に見られるように、対人恐怖心性と自己愛傾向との関係においてほとんどの組み合わせにおいて有意な負の相関関係が見られた。しかし、相関係数は有意ではあってもその値は全体的に低く、係数にしても-0.645~-0.124と組み合わせによって様々であり各因子ごとの関連が一樣でないことを反映していた。これらのことより結論的な解釈は避けなければならないが、少なくとも対人恐怖心性と自己愛傾向には、一貫して負の相関関係が見られることを確認しておく必要があるように思われる。

#### 対人恐怖心性と NPI-S の4因子下位尺度得点でのクラスタ分析

堀井・小川 (1997b) は、対人恐怖心性の質的な観点か

TABLE 3 自己愛人格目録 (NPI-S) の因子分析結果 (Varimax 回転)

質問項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
23 私は、みんなの人気者になりたいと思っている。	.773	-.001	.124	.104	.624
8 私は、どちらかと言えば注目される人間になりたい。	.756	.256	.247	.025	.698
5 私は、みんなからほめられたいと思っている。	.723	.062	-.008	.050	.529
26 私は、人々の話題になるような人間になりたい。	.722	.095	.110	.195	.580
2 私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある。	.677	.257	.278	-.013	.601
20 機会があれば、私は人目に付くことを進んでやってみたい。	.670	.310	.136	.133	.582
14 私は、多くの人から尊敬される人間になりたい。	.659	.198	.029	.185	.509
11 周りの人が私のことをよく思ってくれないと、落ち着かない気分になる。	.547	-.193	-.069	-.112	.354
29 人が私に注意を向けてくれないと落ち着かない気分になる。	.515	-.064	.177	.007	.301
17 私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい。	.504	.152	.221	.188	.362
3 私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う。	.142	.769	.134	.154	.653
24 私は、自己主張が強いほうだとおもう。	.190	.739	.099	.050	.594
6 私は、控えめな人間とは正反対の人間だと思う。	.220	.672	.070	-.068	.509
30 私は、個性の強い人間だと思う。	.054	.589	.270	-.006	.423
12 私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ。	.040	.557	.072	.157	.341
15 私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う。	.257	.550	.039	.221	.419
9 私は、どんなときでも、周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている。	-.068	.542	.150	.107	.332
27 私は、自分独自のやり方を通すほうだ。	-.104	.539	.229	.059	.358
21 いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう。	.312	.442	.241	.280	.430
1 私は、才能に恵まれた人間であると思う。	.108	.108	.833	.133	.735
7 私は、周りの人たちより有能な人間であると思う。	.209	.208	.809	.127	.757
4 私は、周りの人たちより、優れた才能を持っていると思う。	.191	.225	.806	.158	.762
16 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている。	.224	.238	.678	.312	.665
25 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う。	.120	.293	.592	.221	.499
10 私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている。	.210	.228	.535	.445	.581
19 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる。	.046	.084	.035	.776	.613
22 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ。	.103	-.027	.169	.694	.522
28 周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれるので自分でもそんなんだと思う。	.225	.056	.238	.556	.420
13 周りの人々は、私の才能を認めてくれる。	.076	.207	.275	.542	.418
18 これまで私は自分の思うとおりに生きてきたし、今後もそうしたいと思う。	-.047	.312	.113	.484	.347
説明分散	4.933	4.122	3.785	2.675	
累積説明率	29.4	39.7	46.7	51.7	

TABLE 4 対人恐怖心性尺度と NPI-S の相関表

	Factor1 (集団に溶け 込めない)	Factor2 (目が気になる)	Factor3 (社会的場 面で当惑する)	Factor4 (自分を統制 できない)	Factor5 (生きることに 疲れている)	Factor6 (自分や他人 が気になる)	対人恐怖心 性尺度合計 得点
Factor1 (注目・賞賛欲求)	-0.196*	-0.173*	-0.285*	0.069	-0.065	0.141*	-0.124*
Factor2 (自己主張性)	-0.373*	-0.346*	-0.645*	-0.202*	-0.203*	-0.249*	-0.465*
Factor3 (有能感)	-0.220*	-0.186*	-0.297*	-0.263*	-0.223*	-0.150*	-0.303*
Factor4 (優越感)	-0.329*	-0.280*	-0.284*	-0.212*	-0.317*	-0.300*	-0.389*
NPI-S・下位尺度合計得点	-0.356*	-0.316*	-0.514*	-0.164*	-0.232*	-0.132*	-0.395*

\*p<.01

らの発達の検討を行っている。その結果、中学生では自我意識が未発達であるため対人恐怖的な不安意識が自他未分化な状態にあるが、高校生になると他者の存在が明瞭に見え始めるために、主に他者とのかかわりなどの対人状況に関する不安を意識するという対他的不安意識が分化され、大学生になると他者とのかかわりによって生ずる対他的不安意識と、主に自己の存在、身体、能力などに関する不安を意識するという対自的不安意識が、より明確に分化してゆく過程を二次因子分析を行うなどの統計的手法によって明らかにしている。本研究においても堀井・小川 (1997b) と同様の手続きによって二次因子分析を行い、同様の因子構造が得られた。その結果を TABLE 5 に示した。この知見を踏

TABLE 5 対人恐怖心性尺度の二次因子分析結果

	Factor1	Factor2
F4 自分を統制できない	.838	.074
F5 生きることに疲れている	.757	.341
F6 自分や他人が気になる	.617	.472
F3 社会的場面で当惑する	.145	.851
F1 集団に溶け込めない	.304	.799
F2 目が気になる	.239	.788

まえて本研究においても対人恐怖心性を大きく対自的不安意識 (第4因子〈自分を統制できない〉・第5因子〈生きることに疲れている〉・第6因子〈自分や他人が気になる〉) と対他的不安意識 (第1因子〈集団に溶け込めない〉・第2因子〈目が気になる〉・第3因子〈社会場面で当惑する〉) の2つに分けて分析することとした。

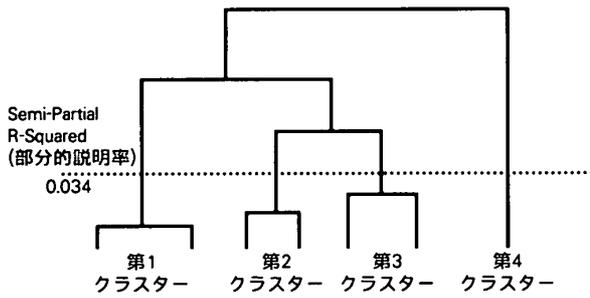


FIGURE 1 クラスター・デンドログラム

そして対人恐怖心性と自己愛傾向の様々な関係を見出して行くためにクラスター分析を行った。クラスター分析では、対人恐怖心性の対他的不安意識と対自的不安意識の2変数とNPI-Sの4因子の4変数とで合計6変数を投入変数(Ward法-平方ユークリッド距離)として扱った。その結果、Semi-Partial R-squared(部分的説明率)0.034%で4クラスターを抽出し、クラスター分析のデンドログラムをFIGURE 1に示した。また、各投入変数ごとの各クラスターの平均値についてそれぞれ1要因の分散分析を行った。その結果、対自的不安意識と対他的不安意識と注目・賞賛欲求と自己主張性と有能感と優越感の全ての投入変数について有意な主効果を示した( $F[3,332]=82.57$   $p<.01$ ,  $F[3,332]=72.33$   $p<.01$ ,  $F[3,332]=70.80$   $p<.01$ ,  $F[3,332]=78.16$   $p<.01$ ,  $F[3,332]=96.37$   $p<.01$ ,  $F[3,332]=64.63$   $p<.01$ )。また、有意な主効果を示したものは、多重比較(Tukey法)を行い分散分析の結果をTABLE 6に示した。

また、それぞれのクラスターの特徴をより捉えやすくするために各投入変数を平均0、標準偏差1の標準化得点に変換して改めて各クラスターごとの平均値を求めた結果をFIGURE 2に示した。第1クラスターは、対自的不安意識も対他的不安意識も高く、自己愛傾向が全体的に低いものであった。第2クラスターは、対自的不安意識が高く、対他的不安意識は、標準的であり自己愛傾向は高かった。また、第3クラスターは、対自的不安意識は低く、対他的不安意識は標準的であり、自己愛傾向が全体的に低いものであった。第4ク

ラスターは、対自的不安意識も対他的不安意識も低く、自己愛傾向が高いものであった。

#### 各クラスターごとの重回帰分析

自己愛傾向が対人恐怖心性にどのような影響を及ぼすのかを検討するために各クラスターごとに対人恐怖心性尺度の下位尺度合計得点及び対自的不安意識・対他的不安意識を従属変数とし、また、NPI-Sの4因子を独立変数として重回帰分析を行った。また、NPI-Sの各因子間に高い相関係数が見られ、多重共線性の可能性が疑われたためにNPI-Sの4因子を因子得点に変換してから分析を行い、その結果をTABLE 7に示した。

第1クラスターでは、対人恐怖心性の下位尺度合計得点には自己愛傾向の注目・賞賛欲求が有意な負の係数を示し、対自的不安意識には自己愛傾向からは有意な係数は見られなかった。対他的不安意識には、注目・賞賛欲求と自己主張性が有意な負の係数を示した。

また、第2クラスターでは、対人恐怖心性の下位尺度合計得点には、注目・賞賛欲求と有能感が有意な正の係数を示した。対自的不安意識には、注目・賞賛欲求と自己主張性が有意な正の係数を示した。対他的不安意識には、有能感が有意な正の係数を示した。

また、第3クラスターでは、対人恐怖心性の下位尺度合計得点と対自的不安意識と対他的不安意識に自己主張性が有意な負の係数を示した。

そして、第4クラスターでは、対人恐怖心性の下位尺度合計得点には自己主張性が有意な負の係数を示し、有能感が有意な正の係数を示した。対自的不安意識には、注目・賞賛欲求と有能感が有意な正の係数を示した。対他的不安意識では、注目・賞賛欲求と自己主張性が有意な負の係数を示し、有能感が有意な正の係数を示した。

## 考 察

#### 各尺度の検討

まず、本研究で使用した尺度について対人恐怖心性については顕著な差は見られなかったが、自己愛傾向

TABLE 6 各クラスターでの各変数の平均と標準偏差

	第1クラスター n=95	第2クラスター n=80	第3クラスター n=89	第4クラスター n=72	多重比較(Tukey法)
人数 男:女	34:61	38:42	31:58	34:38	
対自的不安意識	67.4(12.2)	63.6(10.1)	48.8(9.96)	44.6(12.1)	$3<1,3<2,4<1,4<2$
対他的不安意識	67.9(15.7)	56.1(14.6)	54.4(12.3)	36.1(11.7)	$4<3<1,4<2<1$
Factor1(注目・賞賛欲求)	31.1(6.85)	36.4(5.07)	26.5(5.93)	38.5(4.84)	$3<1<2,3<1<4$
Factor2(自己主張性)	22.2(5.05)	29.6(4.83)	26.6(4.71)	33.3(4.72)	$1<3<2<4$
Factor3(有能感)	11.1(3.43)	17.1(4.02)	14.3(3.21)	20.4(4.01)	$1<3<2<4$
Factor4(優越感)	12.1(2.51)	15.2(2.41)	15.2(2.43)	17.2(2.42)	$1<2<4,1<3<4$

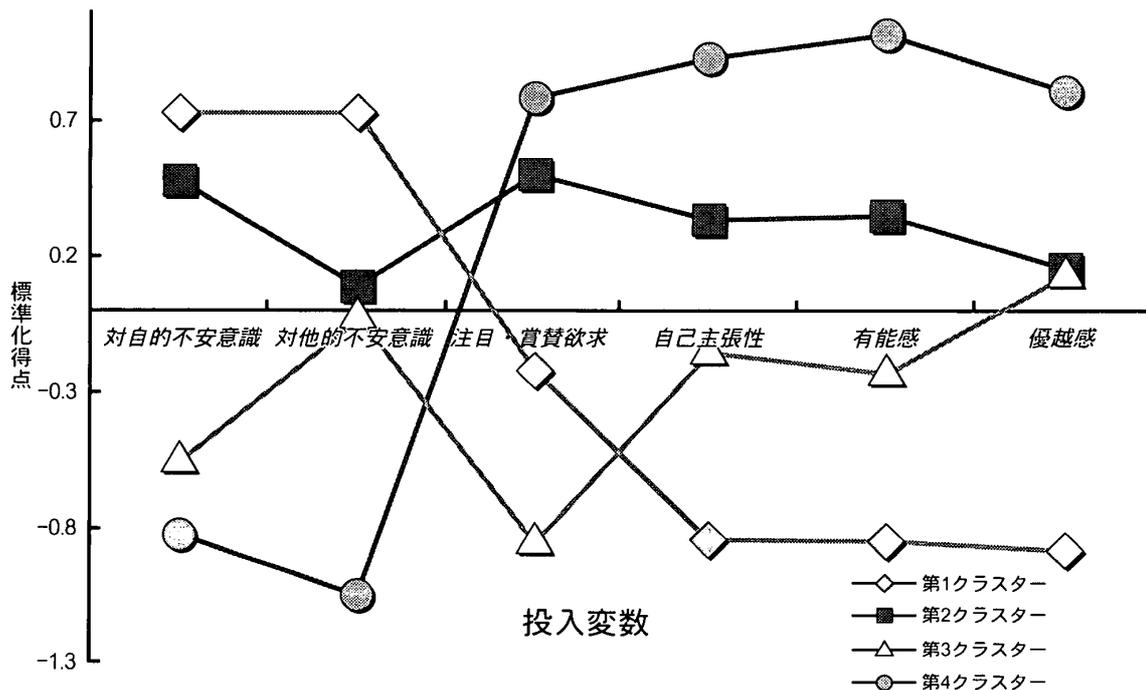


FIGURE 2 クラスタ分析結果

TABLE 7 各クラスターごとの重回帰分析結果

	第1クラスター			第2クラスター		
	対人恐怖心性合計得点	対自的不安意識	対他的不安意識	対人恐怖心性合計得点	対自的不安意識	対他的不安意識
注目・賞賛欲求	-0.232*	-0.056	-0.324*	0.409*	0.485*	0.171
自己主張性	-0.126	-0.013	-0.188*	0.054	0.383*	-0.194
有能感	0.031	-0.011	0.057	0.396*	0.147	0.387*
優越感	-0.103	-0.196	-0.011	0.107	0.177	0.009
R-square	0.09	0.03	0.17	0.28	0.21	0.29
F-value	6.26	3.45	9.28	7.23	5.21	8.14

	第3クラスター			第4クラスター		
	対人恐怖心性合計得点	対自的不安意識	対他的不安意識	対人恐怖心性合計得点	対自的不安意識	対他的不安意識
注目・賞賛欲求	-0.031	0.018	-0.019	0.075	0.315*	-0.197*
自己主張性	-0.262*	-0.258*	-0.199*	-0.223*	-0.106	-0.276*
有能感	0.081	-0.021	0.143	0.409*	0.271*	0.426*
優越感	-0.085	-0.169	0.003	-0.071	-0.115	-0.002
R-square	0.07	0.06	0.06	0.23	0.17	0.35
F-value	5.16	3.63	4.03	9.88	6.41	12.4

\*p<.05

の性差として男子の方が女子よりも高い自己愛傾向を示す結果を示した。これは、従来のNPIを用いた多くの調査研究でも同様のことが示されており過去の知見を支持するものとなった(佐方, 1986; 大平, 1989; 三船・氏原, 1991; 角田, 1998; 小塩, 1998a)。

相関分析について

対人恐怖心性尺度とNPI-Sの相関表から対人恐怖心性と自己愛傾向は、ほとんどの対人恐怖心性の因子と自己愛傾向の因子の組み合わせにおいて、ばらつきは認められるものの全体的に有意な負の相関を示して

いた。このことは、Raskin & Hall (1981)の研究での自己愛と社会的な不安のあいだには有意な負の相関が見られるとしているものと結果を同じくしている。また日本では岡田・永井(1990)は、対人恐怖心性と自己評価との関連を検討しているが、青年期後期において対人恐怖心性と自己評価とのあいだに負の相関関係を見出し、現実自己と理想自己のギャップを青年が埋められないまま、低い自己評価のもとで対人恐怖心性が生じやすいとしている。ところで小塩(1998)は、NPIと自尊感情との関連の中で自己愛傾向と自尊感情が正

の相関を示すことを明らかにしており、これは自己愛傾向が自尊感情と類似したものであり自己の肯定的な感覚を含み、自分自身に高い価値観を認知している状態であるとしている。この小塩の自己愛傾向と自己評価の類似性についての検討を踏まえると、岡田・永井の対人恐怖心性と自己評価とが負の相関を示したことと同様に対人恐怖心性と自己愛傾向とは負の相関関係が見られることが考えられるのが妥当である。そして本研究においても同様の結果を得た。

しかし、対人恐怖は自己愛の高まりに圧倒されることによって経験されるとの“対人恐怖は自己愛の病理である”という臨床的な知見で、この現象を考えたときに対人恐怖心性と自己愛傾向との関係において負の相関が見られるのは矛盾している現象である。もちろん“対人恐怖が自己愛の病理である”というのはあくまで“臨床群”での知見によるものではあるが、本研究における“正常群”においても病理としての視点ではなくても正常な範囲での対人恐怖が正常な範囲での自己愛の高まりに圧倒されることは全く考えられないことではない。

この現象は、対人恐怖と自己愛の関係には、いくつかのサブタイプがあり、それらが全体として混在しているために相関係数の数値の上では負の相関関係を示し、このような矛盾した現象を生み出しているという解釈の可能性があることが考えられる。

#### クラスター分析について

そこで対人恐怖心性と自己愛傾向の関係にはいくつかのパターンが見られることを念頭に置いて、そのタイプを抽出するためにクラスター分析を行った。その結果、4つのサブタイプを得た。

岡野(1998)は、恥と自己愛との関係について考える際には、「恥の感じやすさ」と「自己顕示傾向」という対人恐怖と自己愛を2つの独立した変数として扱う必要があるとしている。また、彼は“自己顕示欲の強さ”と“恥に対する敏感さ”の2つの独立変数を両軸にとって4つの象限にサブタイプを分類したものを示している(FIGURE 3)。

FIGURE 3に示してあるとおり、岡野の分類ではGabbardのいう2つの自己愛人格のタイプと、いわば「純粋な」対人恐怖とが入ることになる。「過敏型」自己愛人格は恥に対する敏感さと自己顕示傾向の両方が強いタイプであり、「無関心型」自己愛人格については自己顕示傾向は強いが恥に対して鈍感なタイプであり、「純粋な」対人恐怖は自己顕示傾向が少なく、ひたすら恥に敏感なタイプであると分類されることになる。ま

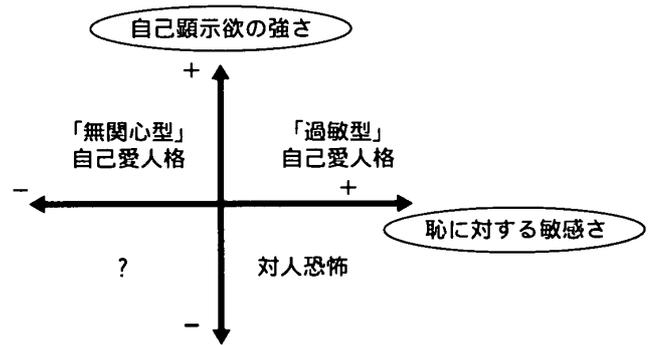


FIGURE 3 敏感さと自己顕示との相互関係  
(岡野, 1998より)

た、自己顕示傾向が低く、そして恥に対して鈍感なタイプは「?」として記述している。

本研究で得られたクラスター分析の結果を岡野(1998)の分類を参考にする上で、もちろん臨床的な体験から得た知見と正常青年の質問紙から得られる知見ではそれぞれ微妙に次元が異なる点はあるが、その含まれる意味合いにおいてほぼ相違点はないと考えられるため“自己顕示欲の強さ”の次元を単純化して“自己愛傾向”に置き換え、さらに“恥に対する敏感さ”の次元を単純化して“対人恐怖心性”に置き換えて考えることとした。すると、第1クラスターにおいては対人恐怖心性が全体的に高く、自己愛人格傾向が低いことから岡野の分類の中では「純粋な」対人恐怖であることが考えられる。また、第2クラスターにおいては、対人恐怖心性が平均より高く、自己愛傾向が高いことから「過敏型」自己愛人格であることが考えられ、第3クラスターでは対人恐怖心性が低く、注目・賞賛欲求の低さをはじめとして自己愛傾向が低いことから、岡野の分類では「?」の部分であることが考えられる。また、第4クラスターでは対人恐怖心性は低く、自己愛傾向が全体的に高いことから「無関心型」自己愛人格であることが考えられる。これにより本研究では、対人恐怖と自己愛の分類において岡野の分類を支持するような4つのサブタイプを得ることができた。

さらに各クラスターごとで自己愛傾向が対人恐怖心性に対してどのように影響を与えているのかという質的な検討を行うために各サブタイプごとで重回帰分析を行った結果、第1クラスターである「純粋な」対人恐怖では、人から注目されたり褒められたいという欲求が少ないことによって一般的な対人恐怖的心性を増長させていることを示している。また、特に他者を含んだ場面においては人から注目されたり自分を主張するという欲求が低いことによって対人恐怖的な心性が

増長されていることになる。これは、自己に対する肯定的な感覚の低さから自分自身に対して不安を感じたり、他者に対して緊張している状態ではないかと考えられる。岡田(1993)の研究では、対人恐怖心性を内省・友人関係・自己評価などの関係からいくつかの対人恐怖の類型を見出しているが、その中で自己評価が低く対人関係で過敏な傾向を示している群を抽出している。岡田は、この群を自己の内面に対して関心が高く、自分の生き方を深刻に考えるような青年期危機的特徴にあたるとしている。本研究で抽出された第1クラスターは、ほぼこの類型に合致するものとして捉えることができる。

また、第2クラスターである「過敏型」自己愛人格では、人から注目されたいという欲求や自らを有能であると認識することによって、総合的な対人恐怖心性を高揚させていることを示し、注目されたいと思ったり自分を主張したいと思うことによって自分自身に対しての対人恐怖的な心性を増長させていることを示し、さらに他者を含んだ場面では自分を有能であると感じることで対人恐怖的な心性を増長させていることを示している。これは、自己愛傾向は旺盛にあるのだが、恥の感覚に対して非常に敏感で内気な態度を示すことが考えられ、自己愛傾向が対人恐怖心性に対して単なる自己に対しての肯定的な感覚としての有能感ではなく、ある意味で誇大的な有能感として影響を及ぼしていることがうかがえるとともに、社会的場面において他者の評価を気にして自意識過剰になるといった特徴が見られることが考えられる。

そして、第3クラスターは、岡野(1998)の分類では「？」とされているが、自らを主張できないことから対人恐怖的な心性を感じていることが示されている。ここでは、自己愛傾向も対人恐怖の心性も低いことから自己に対しての関心が非常に低い状態にあることも考えられる。岡田(1993)は、クラスター分析によって内省傾向が低く、対人恐怖的な心性が比較的低い群を抽出しており、この群を「ふれ合い恐怖の心性」として取り扱っている。この「ふれ合い恐怖の心性」は、正常圏に近い青年を中心として増加しており“サブクリニカルな症候群”として呼ばれている。おもに、顔見知りからより親密な関係に発展する場面において困惑を感じるものであり、そのために対人関係において情緒が深まらず機械的形式的関係にとどまってしまうものであるとしている。彼らは、浅い付き合いは上手にこなすことはできても深い付き合いには困難をきたす者が多く、自分自身の内面の情緒状態に目を向けるこ

とを回避し、自分自身の葛藤からも目をそむける傾向が見られるとされている。このことを踏まえると本研究での第3クラスターは、この「ふれ合い恐怖の心性」に非常に近いものと推測される。

最後に、第4クラスターは、「無関心型」自己愛人格であり総合的な対人恐怖心性に、自分が有能であることを認識することによって対人恐怖的な心性を増長させ、それとは逆に自分を主張することによって対人恐怖心性を低減させている。また、自分自身に対しては、注目されたいという欲求や自分を有能であると認識することによって対人恐怖心性を増長させ、他者を含んだ場面では自分を有能であると感じることによって対人恐怖を増長させて、人からほめられたいであるとか自分を主張したいと思うことによって対人恐怖的な心性を低減させている。これは、自らを主張することには何の気兼ねもしてはいないが、自らが誇大的な存在であると感じることでは多少なりとも不安を増長させていることが予想される。「無関心型」とは言っても自己愛の側面から一方では不安を増長させる要因が存在したり、一方では不安を低減させる要因が存在したりしていることから、自己愛から一様でない影響を受けていることが示されており、必ずしも全ての面において自己顕示的な傾向を示すわけではないことが示唆された。

ところで、第1クラスターと第3クラスターでは、重回帰式の説明率が第2クラスターと第4クラスターに比較して著しく低い値を示している。このことを勘案すると自己愛の影響を受けているとして対人恐怖を説明できる可能性があるのは「過敏型」自己愛人格と「無関心型」自己愛人格の2つのサブタイプであることが考えられ、第1クラスターと第3クラスターでは直接的に自己愛の因果関係の影響を受けているとは説明しきれないのではないかと解釈するのが妥当であろう。

このように対人恐怖心性と自己愛傾向のあいだにはいくつかのサブタイプがあり、臨床的な知見とも少なからず一致する点も多く見られる。しかし、本研究で示された知見は、あくまで健常な青年一般における心性レベルにおける分類であるため、一般青年の特徴としての独自の分類であるとも言える。

本研究では“正常群”における対人恐怖と自己愛の関連について検討しており、一般的な青年の心理的な傾向を理解するのに非常に有用な視点を提言しているものであると思われる。しかし、このサブタイプ分類の妥当性など推測の部分も多く残されているのは事実であり、今後更なる臨床的な知見や実証的な知見を

あわせて検討してゆくことが必要であり対人恐怖と自己愛のサブタイプの特徴を明確にしてゆくために種々の心理測定尺度との関連や影響を考察して行くことが望まれる。

また、今後の研究課題として自己愛傾向は家族関係との関連に大きな関心が向けられており、これらの関連性を明らかにしてゆくことも今後の重要な論点である。また、これまで青年自身を調査対象とした研究はいくらか見られているが、その両親を調査対象とした研究は数少ない。こうした方法によって、自己愛傾向と家族関係についてのより幅広い知見が得られる可能性があることもおおいに考えられる。

そして、その上でさらに縦断的な検討も視野に入れた詳細な家族関係の中での対人恐怖と自己愛の関連を明らかにしてゆく必要もあると考えられる。

### 引用文献

- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4<sup>th</sup> ed.) : DSM-IV*. Author, Washington, DC.
- Broucek, F. 1991 *Shame and the self*. Guilford Press, New York.
- Emmons, R. 1981 Relationship between narcissism and sensation seeking. *Psychological Reports*, 48, 247—250.
- Gabbard, G. 1989 Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527—532.
- 堀井俊章・小川捷之 1996 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55—65.
- 堀井俊章・小川捷之 1997a 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, 21, 43—51.
- 堀井俊章・小川捷之 1997b 青年期における対人不安意識の発達的变化 心理臨床学研究, 14 (4), 448—455.
- 稲浪正充・笠原 嘉 1968 大学生と対人恐怖症 全国大学保健管理協会誌, 4, 24—28.
- 角田 豊 1998 共感性と自己愛傾向の関連—共感経験尺度改訂版(EESR)と自己愛人格目録(NPI)を用いて— 心理臨床学研究, 16 (2), 129—137.
- 木村 駿 1982 日本人の対人恐怖 勁草書房
- 北西憲二 1995 自己愛的傾向の強い対人恐怖の治療—森田療法における感情の扱いをめぐる— 精神科治療学, 10, 1319—1327.
- 北西憲二 1998 自己の心理学 自己意識過剰—対人不安— 心の科学, 82, 37—41.
- 三船直子・氏原 寛 1991 青年期の自己愛人格について—実証的研究を中心に— 大阪市立大学生活科学部紀要, 39, 199—213.
- 宮下一博・上地雄一郎 1985 青年におけるナルシズム(自己愛)的傾向に関する実証的研究(1) 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 1, 51—61.
- 永井 徹 1994 対人恐怖の心理—対人関係の悩みの分析— サイエンス社
- 大平英樹 1989 自己愛人格と家族関係に関する実証的研究 家族心理学研究, 3 (1), 1—10.
- 岡田 努・永井 徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究, 60 (6), 386—389.
- 岡田 努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4 (2), 162—170.
- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社
- 小塩真司 1998a 自己愛傾向に関する一研究—性役割観との関連— 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科(名古屋大学教育学部), 45, 45—53.
- 小塩真司 1998b 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280—290.
- 小塩真司 1998c 青年の自己愛傾向と友人関係—高校生を対象として— 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 148.
- Raskin, R., & Hall, C. 1979 A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Raskin, R., & Hall, C. 1981 The Narcissistic Personality Inventory: Alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, 45, 159—162.
- 佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定—自己愛人格目録(NPI)の開発— 和歌山県立医科大学進学課程紀要, 16, 63—76.
- 山本都久 1993 自己愛人格目録の作成 富山大学教育学部紀要A(文科系), 44, 101—110.

## 付 記

本稿の執筆にあたり、並々ならぬご協力をいただきました  
 ました広島修道大学大学院人文科学研究科の川邊浩史

さん、梶原慶さん、斎藤崇さん、学部学生の下釜桂さん、  
 北川彩さんに深く感謝いたします。また、本稿は  
 筆者を心より応援してくれた亡き母に捧げます。

(2000.12.18 受稿, '01.10.31 受理)

## *Anthropophobic Tendency and Narcissistic Personality in Adults*

KENJI SHIMIZU (GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES, HIROSHIMA SHUDO UNIVERSITY) AND

TOSHIRO KAIZUKA (HIROSHIMA SHUDO UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2002, 50, 54-64

The present research aimed at analyzing the relation between anthropophobic tendency and narcissistic personality. Questionnaires about anthropophobic tendency and narcissistic personality were completed by 336 university undergraduates and graduate students (199 women, 137 men ; average age : 19:7 years). The results were as follows : A significant negative correlation was found between anthropophobic tendency and narcissistic personality ; some patterns of anthropophobic tendency and narcissistic personality were inter-fused. Cluster analysis revealed 4 subtypes of anthropophobic tendency and narcissistic personality : pure anthropophobic type (Cluster 1), hypervigilant type (Cluster 2), commu-phobic type (Cluster 3), and oblivious type (Cluster 4). Clusters 2 and 4 were greatly influenced by narcissistic personality. Narcissistic personality was positively related to anthropophobic tendency.

Key Words : anthropophobic tendency, narcissistic personality, university students